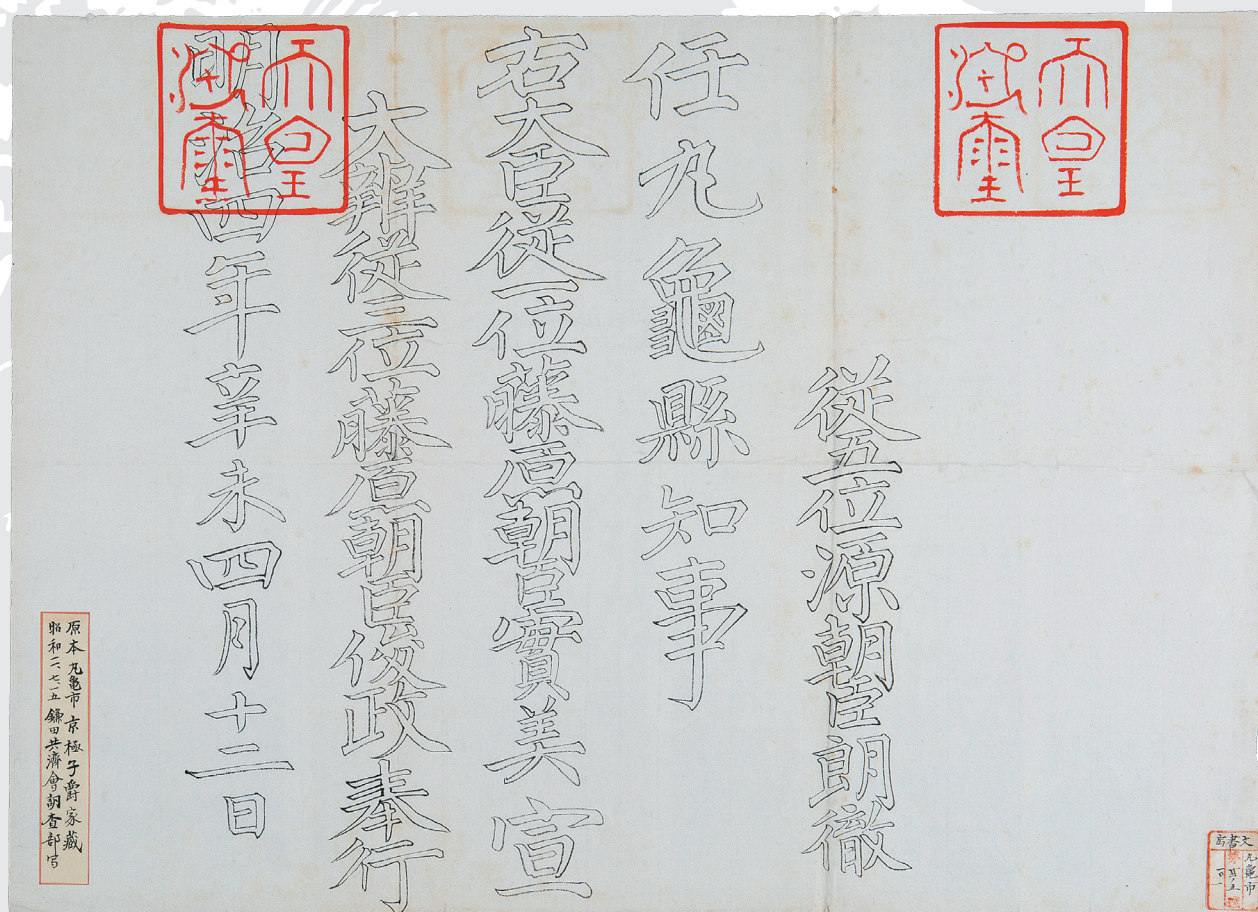


郷土博 通信

No.26

2025 秋



『從五位源朝臣朗徹、任丸龜縣知事辞令書』(解説6頁)



CONTENTS

- | | | | |
|-----------------------|-----|---------------------------|---|
| ■『從五位源朝臣朗徹、任丸龜縣知事辞令書』 | 1 | ■『從五位源朝臣朗徹、任丸龜縣知事辞令書』について | 6 |
| ■展示室の紹介 | 2~4 | ■INFORMATION | 6 |
| ■陶芸体験講座Ⅲ | 5 | | |

第2展示室

(展示期間:10月～3月)

郷土博物館における久米通賢関係資料

久米通賢関係資料（以下、久米資料）は、久米通賢（1780－1841）の測量や天文の技術を伝え、また、坂出の産業の礎となった塩田開発を後世に永く伝える貴重な資料として、坂出の歴史や文化を紹介する際は必ず展示されてきました。

今回は、保管している展示目録から久米資料の展示の歴史を振り返り、改めて郷土博物館における久米資料の重要性を考えます。

共済会会頭鎌田勝太郎は、皇太子殿下（昭和天皇）の行啓^{くにおみやなが}や久邇宮良子女王殿下などの皇族の台臨、そして徳川宗家第16代当主の徳川家達^{いえさと}や大隈重信といった政界の重鎮を迎える際、まず久米資料を閲覧に供しました。迎賓の中でも最も古い記録は1913（大正2）年の大隈重信の来訪（図1）の時のものです。この時に作成された「久米通賢翁遺品目録」からは「御内御用測量下図」など畳6帖分もある大型の資料を陳列したことが確認できます。

1922（大正11）年10月には資料の調査・収集を担当する調査部が設置され、その翌月には皇太子殿下を迎えました（図2）。「平賀源内／久米通賢／勤王志士遺品陳列目録」によれば、製作品・製図設計書類・天文武器書類、と久米資料が分類ごとに陳列されており、調査部による資料整理や調査が進められていたことが分かります。

翌年1923（大正12）年には「皇太子殿下行啓記念第一回史料展覧会」が一般観覧者に向けて開催されました。目録（図3）には、塩田開墾の功績を称え1907（明治40）年に農商務大臣松岡康毅^{やすたけ}が追賞した銀杯を陳列した記録があります。このことは、久米通賢の業績が没後66年の次の世代においても高く評価されていたことを示しています。

鎌田勝太郎は、大正11～12年の皇太子殿下の行啓と久邇宮良子女王殿下の台臨、その後の御成婚を記念して1925（大正14）年に郷土博物館を建設しました。以降、久米資料を中心として本格的に展示活動を展開していきます。

このように久米資料は博物館が開館する以前より、様々な来賓や来館者を迎え見守り続けてきました。

久米資料があってこそこの郷土博物館の誕生であり、それはまさに当博物館の「生みの親」と言える存在です。当博物館の歴史を語る証人としての貴重な資料を、これからも守り伝えていきます。

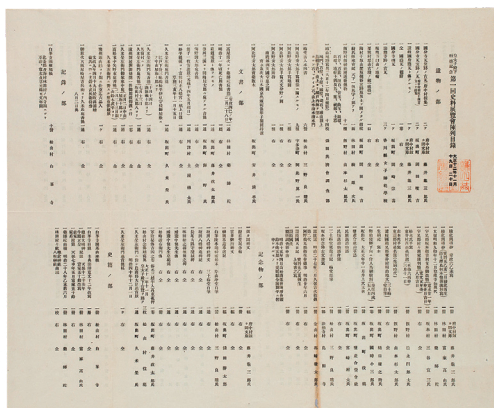
(矢野 愛)



▲図1 大隈重信来邸時の集合写真
①大隈重信 ②鎌田勝太郎
出典:『淡翁鎌田勝太郎伝』
(1974初版)より部分



▲図2 皇太子殿下鎌田共済会行啓の様子



▲図3 皇太子殿下行啓記念
第一回史料展覧会陳列目録

第3展示室

(展示期間:10月~3月)

郷土博物館100年の活動史

1918(大正7)年に財団法人鎌田共済会が設立され、1922(大正11)年に図書館、1925(大正14)年に郷土博物館、1927(昭和2)年に社会教育館、1934(昭和9)年に武道館といった社会教育施設が建設されました。その中で唯一存続しているのが郷土博物館です。開館100年を機に、郷土博物館の運営にかかわる資料をもとに活動の歴史をご紹介します。

調査部の設立

1922(大正11)年9月に鎌田共済会図書館が開館し、同年10月には香川県史蹟名勝天然記念物調査委員でもある岡田唯吉を主事に迎え、郷土の歴史地理に関する調査収集を行う調査部が設立されました。当面の仕事は、1ヶ月後に控えた皇太子殿下(昭和天皇)行啓の対応です。図書館2階講堂で平賀源内、久米通賢、勤王志士の資料をご覧いただき、香川の偉人を紹介しました。

行啓にかかわる仕事が落ち着くと、調査部としての事業が本格的に始まります。毎年11月に開催した行啓記念讃岐史料展覧会では、県内の所蔵家から資料を借用して陳列するという方法を用いることで、知られざる郷土資料を発掘し、かつ借用資料の写しをとり資料収集につとめました。また、久米通賢の調査研究も行われました。

郷土博物館の開館

1924(大正13)年1月1日の新聞で、皇太子殿下と久邇宮良子女王殿下の婚儀が同月27日(後に26日に変更)に決定したと公表されました。この報道を受け、鎌田共済会は1922(大正11)年に皇太子殿下、翌年に良子女王殿下が図書館で久米通賢関係資料をご覧になったご縁にちなみ、御成婚記念郷土博物館を建設する計画を発表しました(図1)。これは「本県内各地に散在せる史料参考物を一カ所にとりまとめ専門家並に一般人の研究調査に便すること」という博物館の目的に沿うよう、具体的には久米通賢関係資料を基礎として、調査部が調査研究した各種資料を陳列し、図書館とも協力して社会教育に貢献しようとするものです。

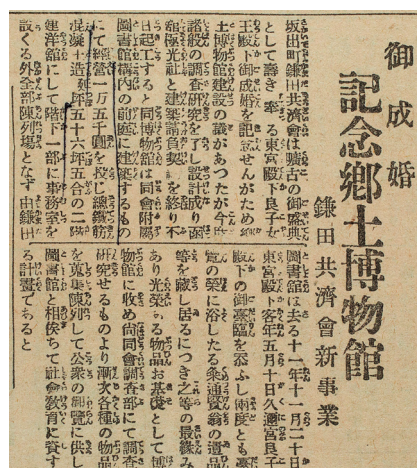
建物建設は3月に地鎮祭が執り行われ、10月に竣工しました。準備期間を経て、郷土博物館は1925(大正14)年5月24日に開館し、第1回陳列が始まります。

陳列(図2)は行啓記念讃岐史料展覧会と同様に資料を借用陳列する方法を

採用し、年に一度のペースで陳列替えが行われました。新しい陳列の公開開始の前、もしくは後には出品者招待会を開催しています(図3)。こ

れは資料出品者に陳列説明をした後に饗応しようとしたもので、博物館が資料所蔵者との間に良好な関係性を築くことに心をくだいていた様子が見て取れます。

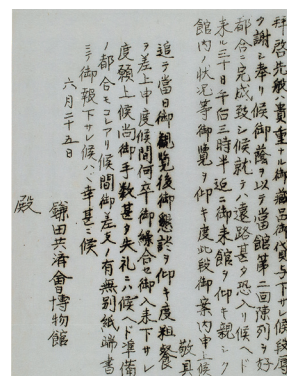
また第3回陳列以降は陳列品への理解を深めるために『陳列品解説』(図4)を刊行し、研究機関や研究者、図書館、付近の小学校等に配布しました。このような活動によって陳列回数を重ねるごとに郷土資料の歴史的価値が認知されるとともに、資料愛護の精神が養われ、埋もれていた資料が



▲図1 香川新報
1924(大正13)年1月23日付



▲図2 博物館2階の陳列状況
1934(昭和9)年3月11日撮影



▲図3 出品者招待会案内状

掘り起こされるなどの相乗効果がもたらされました。

調査部設立以来続けられている資料収集も、陳列事業に好循環が生まれたことで、より多くの人々の協力を得て行えるようになっていきました。博物館を郷土史調査研究の中心地とするため、購入・寄贈で資料を集めるほか、写しをとったり写真撮影を行うことで複写資料をも収蔵し、所蔵資料を充実させようとしたのです。現在では原資料が所在不明となり、当館の複写資料が唯一の資料となってしまったものもあります。

調査研究については、讃岐史等に関する問い合わせに対し調査して回答するほか、遺跡発掘調査や調査成果として出版物刊行(図5)などが行われました。

それぞれの事業が相互に関わる質の高い活動を続けてきた鎌田共済会調査部・郷土博物館は、全国的にも高い評価を得ていたようです。

戦中・戦後の博物館

やがて戦争の影がせまってきます(図6)。物資不足が影響し、『陳列品解説』の刊行は1942(昭和17)年12月に発行した第16回が最後となってしまいました。陳列は第19回まで行われましたが、博物館建物^{じゆひんしょう}は1944(昭和19)年6月に軍の要望により需品廠として使用され、そのまま終戦を迎えることになります。

戦後、建物は香川県食糧営団坂出支団事務所、市立病院、神戸税関坂出支署、理容学校、算盤学校などに使用され、博物館の閉館状態が続きました。

1953(昭和28)年にようやく土日のみの仮開館が始まり、1955(昭和30)年4月1日からは毎日開館(月曜休館)し再開館することができました。以降は『郷土文化』の発行、資料の展示、研究者による調査研究の対応といった活動をしていました。

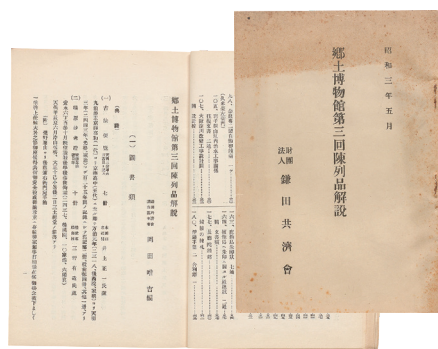
平成に入ると博物館が坂出駅付近の鉄道高架に伴う市道拡幅事業用地となったため、建物は取り壊されることになりました。1991(平成3)年、博物館は図書館であった建物に移転し、現在に至ります(図7)。

現在の博物館活動

2011(平成23)年、鎌田共済会が公益財団法人に認定されたことを機に博物館活動の活性化が図られ、現在は年2回の展示替えと機関誌『郷土博通信』の発行、講座の開催等を中心に活動しています。

大正・昭和・平成・令和と100年もの月日が流れ、社会は大きく変化しましたが、人々が郷土を大切に想う心、より良い未来を築くために歴史を学ぼうとする姿勢は変わることがありません。今日まで博物館を支えて下さった多くの方々に感謝するとともに、これまで以上に充実した活動に努めてまいりますので、皆様のご協力をお願いいたします。

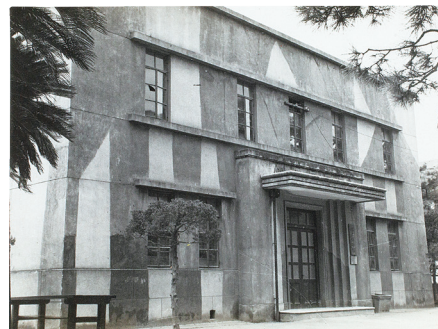
(宮武 尚美)



▲図4 郷土博物館第3回陳列品解説
1928(昭和3)年6月8日発行



▲図5 讃岐偉人 久米栄左衛門翁
1928(昭和3)年4月5日発行



▲図6 防空のため迷彩にペイントされた博物館



▲図7 現在の鎌田共済会郷土博物館

陶芸体験講座Ⅲ

黒田陶房 黒田 大 先生
黒田 真里子 先生

「もようをつけてDOKI♡土器」を終えて

黒田 大

2025（令和7）年7月26日（土）に小学生・中学生を対象に「もようをつけてDOKI♡土器」が開催されました。当日は猛暑の中、たくさん子ども達、保護者の方に参加していただき賑やかに体験がスタートしました。

今年度で3回目の陶芸講座になります。今回はあらかじめ陶房で土器の土台を用意し、参加者の皆さんは土器を削ったり、模様をつけたりしてオリジナルの縄文土器の制作に挑戦します。

日本最古の縄文土器は^{おおだいやまと}大平山元Ⅰ遺跡（青森県東津軽郡外ヶ浜町）から出土されたもので約16,500年前と推定されています。

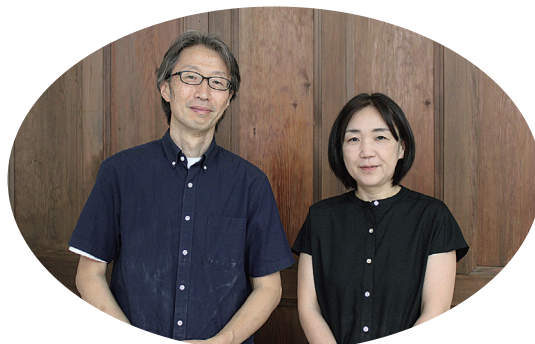
香川県では小蔦島貝塚（三豊市仁尾町）から出土した約8,000年前の土器が最古とされています。

縄文土器は主に煮炊きや貯蔵、祭祀など様々な用途に使われました。

制作にあたり、講座に参加してくれた子ども達のほとんどが陶芸初体験のため、最初は土器の口縁部分をカットすることに躊躇する場面が見受けられました。そのうちに、穴をあけたり粘土で装飾を施したりして飾りつけをするようになっていきました。

参加者が出来上がった作品をお互いに見せ合い、感想を述べ合いながら夏休みの楽しい時間を共有することができました。

また、「親子で協力して制作できた」、「縄文時代の人の工夫や苦勞が感じられた」、などの声をいただきました。



個性あふれる作品は焼成後、自宅でペン立てや鉢カバーとしても使っていただけます。現代の日常に溶け込む縄文土器を楽しんでいただけたら幸いです。



縄文土器の原型から飾りつけへの見本



細かい模様を施す様子



完成した縄文土器

『從五位源朝臣朗徹、任丸亀県知事辞令書』について

(表紙解説)

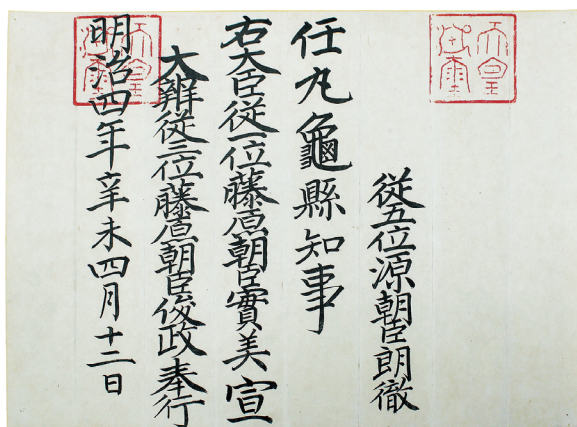
ひとつひとつの文字の輪郭を細い線で書いた、見た目、ちょっと不思議な文書。実は当館が所蔵する複写資料(表紙写真)で、原本資料ではありません。

書かれている内容を見ると、1871(明治4)年辛未4月12日付けで、明治政府の右大臣・三条実美が、明治維新後に「丸亀藩知事」になっていた旧丸亀藩主・京極朗徹に対して「丸亀県知事」に任命した辞令書です。上部の左右には朱色の「天皇御璽(明治天皇の印)」も見えます。江戸時代から続く丸亀藩が、明治維新後、新たな政府の時代を迎えて、「藩」から「県」に変化していく過程を物語る郷土の歴史資料として大切なものといえます。

複写資料の原本(図1)は、当館が明治初期の丸亀藩に対する公文書のひとつとして京極子爵家から借り、1935(昭和10)年12月から翌年10月までの期間に開催した第11回陳列で公開しました。複写資料は、原本を借りている期間中の1936(昭和11)年7月15日に、鎌田共済会の調査部が作製した「写」であることが、左下の貼り紙の記録内容からわかります。

古文書や書跡、さらには絵図や地図といった文字を含む資料の原本を写す場合、①原本の上に別の透明もしくは半透明な紙を重ねて、書体、筆致、墨色等を忠実に写す(影写=敷き写し)、②原本を横に置いて、原本の内容を、別の紙に写す(謄写=見取り写し)といった方法があります。複写資料は、まさに①の敷き写しの方法で作られた原寸大のもので、文字は輪郭線で表現していますが、なぜそうしたのか、その理由については残念ながらわかりません。

(齊藤 祐司)



▲図1 京極家資料の内「丸亀県知事任官辞令」
丸亀市立資料館所蔵

INFORMATION

■鎌田共済会郷土博物館 第15回公開講座

『次の100年へ』

～「星眼鏡」が語りかけるものを胸に～

2025年11月1日(土) 13:30～16:00

会 場: 坂出市民ふれあい会館2階

講座①: 「香川の博物館事始め」

講 師: 野村 美紀氏(香川県立ミュージアム副館長)

講座②: 「郷土博物館開館への道

～調査部の奮闘を中心に～」

講 師: 山本 秀夫(当館館長)

【申込10月1日(水)から、先着50名、参加無料】

電話またはホームページからお申込み下さい。

電 話: 0877-46-2275

H P: <https://www.kamahaku.jp>

※詳しくはホームページをご覧ください。



鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

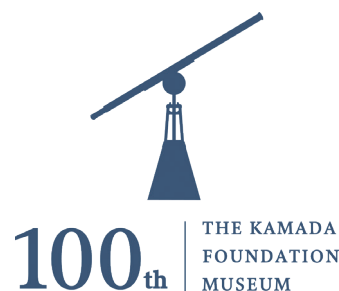
開館時間: 午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

休 館 日: 月曜日/祝日

夏季特別(8月13日～15日)

年末年始(12月29日～1月4日)

入 館 料: 無料



【博物館のロゴマークについて】

久米通賢の自作と伝えられる天体望遠鏡「星眼鏡」(重要文化財)は、江戸時代後期の天体観測用具として貴重なものです。鎌田共済会郷土博物館の活動をこれから先もずっと見守り続けてもらえるように博物館開館100年を記念して、この星眼鏡を当館のロゴマークとしました。